

研究論文

# フィラー的用法の「で」、「あの（ー）」、「え（ー）」、「ま（ー）」の インタビュー談話における出現率について

百 瀬 みのり

## Frequency of Fillers *de*, *anoo*, *ee*, *maa*, on Spoken in Television Interviews

MOMOSE Minori

### 〈Abstract〉

This paper explains how the Japanese fillers *de*, *anoo*, *ee*, and *maa*, respectively, and shows their frequency in sentences spoken in television interviews.

The following three observations are made:

Firstly, the Japanese fillers are constituted conjunctives, demonstratives, interjections, and adverbs systems, and they are universal from the 1960s to the 2010s.

Secondly, the foams top 3 about the frequency of each system covers top 70% or more.

Thirdly, I recommended studying the conversation guidance including the fillers *de*, *sonoo*, *ee*, *aa* and *maa* on Japanese language education.

キーワード：フィラー、インタビュー資料、出現率、会話モデル、会話練習

## 1. はじめに

本論は、フィラー的用法を持つ「で」、「あの（ー）」、「え（ー）」、「ま（ー）」の、インタビュー談話における出現率について考察し、その結果から日本語教育の会話指導に提言を行うことを目的とするものである。

フィラーについては、「話そうとして、ことばを探したり、会話の順をとるために声出しをしたり（略）また、一時的に文を述べることを中断してしまう」ような「そうしたときに、「あう」とか「えーと」というようなことばを発する。これを「言いよどみ」（フィラー filler）と呼ぶ（森山，2005，p.188）。」と、本論では考えることとする。本論ではインタビュー談話を資料としてそこに現れるフィラー的用法を持つことばについて調査を行い、それらの出自別に頻出する形式を確認したところ、その出自が接続詞、指示詞、感動詞、副詞であるフィラー的用法を持つ形式については、頻出する形式の上位3位までの形式によって出自別の出現率の70%以上をカバーしていることが分かった。そこでこれらについて資料中の用例を用いて確認を行い、その結果を日本語教育の会話指導への提言と

することを試みたい。

なお、本論中の用例は、テレビのインタビュー番組の対話音声とその採集資料とするものである。資料については本論では「インタビュー資料」とし、資料の内容については論末に挙げる。このインタビュー資料については、NHK 番組アーカイブス学術利用トライアル 2017 年度第 2 回閲覧採択課題「NHK インタビュー番組中の談話に見られるフィラーのはたらきをもつ接続詞について～その発生の経緯、種類、機能、表現効果から戦後の日本語談話の変遷を考える～」の一部を使用した。

## 2. 先行研究と問題の所在

まず、フィラーの研究史を確認する。フィラーの研究の歴史は三つの時期に分けて考えることができる。

初期の 1930 年代から 40 年代にはフィラーを指す特段の呼称はなく、それを品詞名で呼んでいた (山田, 1908, p.128-136、橋本, 1948, p.56-67)。この時期はフィラーの機能がまだまだ注目されていなかったことを示唆していると思われる。

次に、50 年代から 80 年代初頭にかけてフィラーの呼称が現れ出した時期が到来する。しかしこの時にはまだフィラーを「知的な命題を構成するものではな」(小出, 1983, p.83) いと、語間の場つなぎに用いられるもの (伊佐早, 1953、遠藤, 1953、塩沢, 1979、小出 1983) ととらえていた。

そして、80 年代以降にフィラーは言語研究の場でその役割を積極的に認識されるようになる。メイナード (1992) はフィラーの会話管理上の意義について述べた (メイナード, 1992, p.117)。山根 (2002) はフィラーの機能を「話し手の情報処理能力を表出する機能」、「テキスト構成に関わる機能」、「対人関係に関わる機能」の三種に分けて考察した (山根, 2002, p.220)。この 80 年代以降の時期から、フィラーは単なる「つなぎのことば」から「談話構成に関わる機能を持つ談話標識」として認められていく。本論でもこの考えを踏襲し、フィラーを談話構成に関与する要素として積極的に捉えていくこととしたい。

次に本論で考察するフィラー的用法を持つ形式について扱った先行研究を、形式の出自別に見ていく。談話中でフィラー的用法をもってはたらく接続詞「で」に注目した先行研究には、平川 (1991)、石黒 (2010) などがある。これらはいずれも大学の講義の談話を資料としており、そこでは接続詞の縮約形、特に「で」の使用率が高いこと (平川, 1991, p.99)、「で」が講義で使用される接続表現中で圧倒的に多く、全体の 44.7% を占める」こと (石黒, 2010, p.140-143) が述べられている。

談話中でフィラー的用法をもってはたらく指示詞の「あの (一)」、「その (一)」につい

フィラー的用法の「で」、「あの（－）」、「え（－）」、「ま（－）」のインタビュー談話における出現率について

ては小出（2009）、大工原（2008）などが扱っている。小出は、「「その－」は「談話参加者と談話内容の領域との関係表示」、「あの－」は「コミュニケーションの開始、談話ステップの移行、談話形成に関する対人的調整」を表す（小出，2006，p.24-25）と述べ、大工原は、金水・田窪（1992）が述べる談話管理理論を踏襲した上で、「「あの（－）」は直接経験領域内の情報の参照に、「その（－）」は間接経験領域内の情報の参照に、それぞれ対応している。具体的に言えば、「あの（－）」は、（略）おおむね、「自分の意図や気持ちを十分にふまえて言語形式を製作する」（略）。一方、「その（－）」は、（略）おおむね、「言語的文脈を十分にふまえて言語形式を製作する」という行動に対応する（大工原，2008，p.55）。」と、その談話内の機能についての整理を行った。

また、フィラー的用法の指示詞「あの（－）」とフィラー的用法の感動詞「ええと」について定延・田窪（1995）は、「「ええと」「あの（－）」は、話し手が何らかの心的操作をおこなっている間に発話される心的操作標識である」とした上で、「「ええと」は話し手が心的操作のために聞き手とのインターフェイスを一時遮断する宣言として働く」とし、「「あの（－）」は、話し手が聞き手とのインターフェイスを遮断するというよりも、むしろ継続・保持しようとしている宣言として働く」とその差異を述べる（定延，田窪，1995，p.74-79）。また、さらにこれを発展させて田窪・金水（1997）は「感動詞・応答詞の類は、心的な情報処理の過程が表情として声に現れたものと言える。」とし、その上で、「「ええと」は基本的には、話し手が知識の検索或いは知識を用いた演算に入る時、あるいは、すでに入っている時に用いられる。つまり、演算領域を確保するために集中したり、聞き手とのインターフェイスを一時的に断絶する際に用いられる。これに対して、「あの－」は、基本的には話し手が聞き手に向けての適切な表現形式（モノの名前等も含む）の検索／作成に入っている時に用いられる。したがって聞き手を必ず予定しひとりごとには現れない」（田窪，金水，1997，p.257-275）とまとめる。

また、フィラー的用法をもってはたらく副詞「ま（－）」について魏（2015）は、「統語的には「ま（－）」の前の要素が独立性の高い場合に、談話的には「ま（－）」の前の要素が談話運営上発話者に有利になるように機能する場合に、「ま（－）」に対偶差が反映される」（魏，2015，p.75）とした。

これらの先行研究はいずれも、教室での談話のような、限られた空間における談話を対象としていたり（平川，1991）、（石黒，2010）、形式は異なるが用法が類似しているフィラーどうしの差異を理論として述べるものであり（定延，田窪，1995）、（田窪，金水，1997）、（魏 2015）、広く対人的な談話を対象としてそこに出現するフィラーについて、その出自の差異別に統計的な考察を行ったものではない。そこで本論ではインタビュー談話に出現

するフィラー的用法を持つ形式を、その出自の差異別に統計的に考察してその出現率を示した上で、出自別に出現頻度が高い形式を示し、その上位 3 位までの形式で出自別のフィラー的用法を持つ形式の 70%以上を占めることを述べ、先行研究を補う。さらにこの結果を日本語教育に還元して、日本語会話教材のフィラー指導に対しての提言を行うことを目指したい。

### 3. インタビュー番組でのフィラー的用法の出現状況

#### 3.1. 全フィラー的用法中における品詞別フィラー的用法

ここではまず、本論でフィラー的用法をもって文中で機能していると考える語を提示する。具体的には、Ⅰ. 統語的条件、Ⅱ. 第三者による認定の二段階の選抜を設け、各段階の選抜の条件を満たした形式のみをフィラー的用法をもってはたらく形式として認めることとした。

Ⅰ. については、本来の品詞としての統語的条件とは異なる位置に置かれ、それが命題的・構文的意味を有していない形式であるとき、それをフィラーとするものである。例を示す。( ) 内の番号については論末に挙げた資料番号を表す。

#### Ⅰ. 統語的条件による選抜

##### 〈接続詞かフィラーか〉

- ・「その時、雨が降ってきた。で、傘をさして、」(⑥)

→上記文の「で」は文頭に置かれ接続詞として機能していると考えられるため、これを接続詞とする。

- ・「僕だって、で、それからいろいろあって、で、どうしようもなかったから。」(③)

→上記文の「で」は文中に置かれて接続詞としてではなく発話をつなぐ形式として機能していると考えられるため、これをフィラーとする。

##### 〈指示詞かフィラーか〉

- ・「あの頃は、まだ子どもも小さかったのね、」(①)

→上記文の「あの」は、指示詞「あの」に名詞「頃」が後続しており、「あの」が名詞の連体修飾語として機能していると考えられるため、これを指示詞とする。

- ・「あの、僕としては、昼間から仕事はしないし…。」(⑨)

→上記文の「あの」は、「あの」に人称代名詞「僕」が後続しているが、この「あの」は人称代名詞「僕」の連体修飾語として機能していないため、これをフィラーとする。

フィラー的用法の「で」、「あの（－）」、「え（－）」、「ま（－）」のインタビュー談話における出現率について

〈感動詞かフィラーか〉

- ・「えー、それはないですよ。」(⑪)

→上記文の「えー」は、文の命題から外れて独立語として機能していると考えられるため、これを感動詞とする。

- ・「そこへ、えー、いわゆる、心臓カテーテル、えー、いわゆる『心<sup>しん</sup>カテ』を」(⑫)

→上記文の「えー」は独立語としてではなく発話をつなぐことばとして機能していると考えられるため、これをフィラーとする。

〈副詞かフィラーか〉

- ・「まーいいやって思って、それで」(⑬)

→上記文の「まー」は、後続語の「いい」の連用修飾語として機能していると考えられるため、これを副詞とする。

- ・「こういうところは、まー、私の、まー、性分、性分ですね。」(⑭)

→上記文の「まー」は、後続語の「私の」、「性分」の連用修飾語としてではなく発話をつなぐ形式として機能していると考えられるため、これをフィラーとする。

〈その他〉

- ・「その時、「あんた、まだ若いんだからいいさ、いいさ。」って言うてくれて。」(②)

→上記文の「あんた」は、文の主語として機能していると考えられるため、これを人称代名詞とする。

- ・「そしたら祖母が「だって、あんた、そりゃ、あんた、うどんだもの。」って。」(⑭)

→上記文の「あんた」は、文の主語としてではなく、発話をつなぐ形式として機能していると考えられるため、これをフィラーとする。

## Ⅱ. 第三者による認定

インタビュー資料の元であるインタビュー番組を文字起こした原稿について、6名の男女（男性3名、女性3名、いずれも20～50代の成人。東京都23区内出生者）に「この語がなくても文意が分かる箇所に印を付けて」と依頼し、6名の印が重複したものをフィラーとした。

以上、Ⅰ.とⅡ.の二段階の選抜を設け、各段階の選抜の条件を満たした形式のみをフィラー的用法をもってはたらくことばとして本論では認めることとした。

上記のようにして選抜した、本論でフィラー的用法を持つとして考える語例を挙げる。

ここでは各フィラー的用法をその品詞から、接続詞系、指示詞系、感動詞系、副詞系、その他として分類して示す (中根, 2002, p.76) (石黒, 2010, p.141-142)。

●接続詞系フィラー的用法を持つ語

「で (ー)」、「だから」、「それから」、「やっぱり」、「ですから」、「やはり」、「そして」、「ほいで」、「それで」、「そいで」、「だけど」、「じゃ (ー)」、「ほれから」、「ほんで」、「すると」、「そうすると」、「あとは」、「なので」、「でも」、「でもね」、

●指示詞系フィラー的用法を持つ語

「あの (ー)」、「その (ー)」、「この (ー)」、「なんか」、

●感動詞系フィラー的用法を持つ語

「あ (ー)」、「い (ー)」、「う (ー)」、「え (ー)」、「お (ー)」、「うーん」、「うーんと」、「えーと」、「えーとですねえ」、「やあ」、「いや (ー)」、「ね (ー)」、「ん (ー)」、

●副詞系フィラー的用法を持つ語

「ま (ー)」、「もう」、

●その他

「あなた」、「あんた」、

なお、上記の中の「●その他」に分類された「あなた」、「あんた」については用例数が少ないため (全 2 例)、本論では考察の対象とはしない。

(表 1) に資料中に見られた品詞別フィラー的用法のことばの出現数を示す。

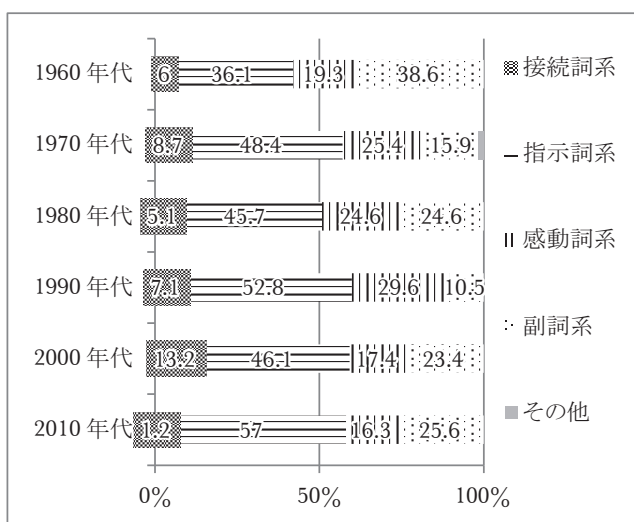
(表 1) は縦に年代別、横に系統別のフィラー的用法の出現数を表す。本論で資料としたインタビュー番組の談話は、話し手と聞き手が固定しておりターンテイキングがない場面での対話、40 分間の部分を各番組使用した。この部分の総文数は 5021 文である。三資料ずつの区切りは①～③が 1960 年代、④～⑥が 1970 年代、⑦～⑨が 1980 年代、⑩～⑫が 1990 年代、⑬～⑮が 2000 年代、⑯～⑲が 2010 年代の資料である。(表 1) を元に全フィラー的用法における品詞別フィラー的用法の比率を、年代別にグラフで示す。

(グラフ 1) より、1960～2010 年代のインタビュー談話におけるフィラー的用法は総じて、接続詞系が 5.2～12.1%、指示詞系が 36.4～53.3%、感動詞系が 15.2～29.6%、副詞系が 10.5～39.0%と、全体を 100 と見ると、接続詞系 7.3、指示詞系 47.4、感動詞系 22.1、副詞系 23.0 の比率を示していると考えられる。これは今回資料とした 1960～2010 年代の

フィラー的用法の「で」、「あの（－）」、「え（－）」、「ま（－）」のインタビュー談話における出現率について

（表 1）〈品詞別フィラー的用法の形式の出現数〉

資料年代	資料種類	接続詞系	指示詞系	感動詞系	副詞系	他	計
1960年代	①	2	13	17	20	0	52
	②	2	17	6	10	0	35
	③	10	54	22	60	0	146
計		14	84	45	90	0	233
1970年代	④	1	2	3	0	0	6
	⑤	4	24	16	8	2	54
	⑥	6	35	13	12	0	66
計		11	61	32	20	2	126
1980年代	⑦	6	33	22	12	0	73
	⑧	2	23	15	23	0	63
	⑨	1	24	6	8	0	39
計		9	80	43	43	0	175
1990年代	⑩	7	50	39	10	0	106
	⑪	7	37	4	4	0	52
	⑫	9	84	53	20	0	166
計		23	171	96	34	0	324
2000年代	⑬	3	10	7	8	0	28
	⑭	7	40	20	21	0	88
	⑮	12	27	2	10	0	51
計		22	77	29	39	0	167
2010年代	⑯	0	11	0	1	0	12
	⑰	1	12	3	6	0	22
	⑱	0	26	11	15	0	52
計		1	49	14	22	0	86
品詞別 合計		接続詞系 80	指示詞系 522	感動詞系 259	副詞系 248	他 2	総合計 1111



（グラフ 1）〈全フィラー的用法における系統別フィラー的用法の比率〉

※数値は%を表す。（四捨五入の調整のため、合計は 100.0%ではない。）



間大きく変化せず、戦後の日本語インタビュー番組でのフィラー的用法の系統について普遍的な面を表していると思われる。

これより、日本語インタビュー番組でフィラー的用法を以て機能するのは接続詞系、指示詞系、感動詞系、副詞系の語、特に指示詞系、感動詞系、副詞系の語が中心であることが、戦後のインタビュー談話におけるフィラー的用法使用の一つの型であると見て良いかと考えられる。

### 3.2. 各系統別に見た、高出現数のフィラー的用法

ここでは(表 1)、(グラフ 1)を基に、各系統別の、高出現数のフィラー的用法を見る。まず、各系統別に出現したフィラー的用法の形式の数値を(表 2)～(表 5)に示す。表中の各フィラー的用法の前に付した丸囲みの数字は出現数の順位を表す。さらに、(表 2)～(表 5)を元に高出現数のフィラー的用法の形式を系統別に(グラフ 2)に示す。

〈各系統別に見た、高出現数のフィラー的用法の形式の数値〉

(表 2) [接続詞系]

年代 \ フィラー	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代	2010年代	計
①で	6	5	2	21	11	1	46
②それから	1	4	1	1	0	0	7
③だから	1	1	1	0	2	0	5
③やはり	0	0	3	1	1	0	5
④やっぱり	0	0	0	0	4	0	4
⑤そいで	2	1	0	0	0	0	3
⑥ほいで	2	0	0	0	0	0	2
⑦そして	0	0	1	0	0	0	1
⑦それで	0	0	0	0	1	0	1
⑦だけど	0	0	1	0	0	0	1
⑦じゃ (一)	0	0	0	0	1	0	1
⑦ほれから	1	0	0	0	0	0	1
⑦ほんで	1	0	0	0	0	0	1
⑦そうすると	0	0	0	0	1	0	1
⑧あとは	0	0	0	0	1	0	1
計	14	11	9	23	22	1	80



フィラー的用法の「で」、「あの（－）」、「え（－）」、「ま（－）」のインタビュー談話における出現率について

（表 3）[指示詞系]

年代 \ フィラー	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代	2010年代	計
①あの（－）	53	36	40	137	39	32	337
②その（－）	21	22	37	34	27	10	151
③この（－）	10	1	1	0	7	0	19
④なんか	0	2	2	0	4	7	15
計	84	61	80	171	77	49	522

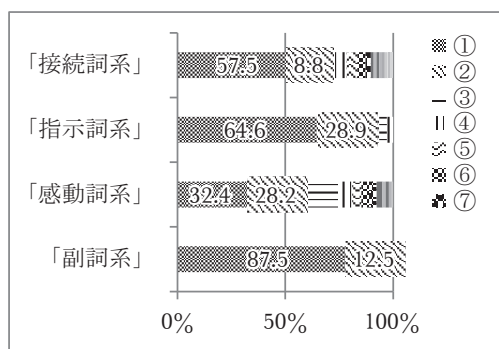
（表 4）[感動詞系]

年代 \ フィラー	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代	2010年代	計
①え（－）	12	9	25	32	6	0	84
②あ（－）	11	3	5	40	9	5	73
③お（－）	7	3	4	18	4	0	36
④うーん	3	7	3	1	1	2	17
⑤ん（－）	1	5	1	2	2	0	11
⑥う（－）	5	0	2	1	1	0	9
⑥ね（－）	4	1	1	0	2	1	9
⑦やあ	1	2	1	0	3	0	7
⑧い（－）	1	1	1	0	0	1	4
⑧いや（－）	0	1	0	0	1	2	4
⑨えーと	0	0	0	0	0	3	3
⑩えーとですねえ	0	0	0	1	0	0	1
⑪うーんと	0	0	0	1	0	0	1
計	45	32	43	96	29	14	259

（表 5）[副詞系]

年代 \ フィラー	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代	2010年代	計
①ま（－）	74	20	37	33	35	18	217
②も（－）	16	0	6	1	4	4	31
計	99	20	43	34	39	22	248

（グラフ 2）によれば、接続詞系では「で」57.5%、指示詞系では「あの（－）」64.6%、感動詞系では「え（－）」32.4%、副詞系では「ま（－）」87.5%が、系統別に見た際に最高出現数を示すフィラー的用法のことばであると言える。さらに、フィラー的用法の形式の中で出現率が高いもののうち、上位3位を系統別に（表 6）に示す。グラフ中の丸印はその系統中での出現順位を表す。



（グラフ 2）〈高出現数のフィラー的用法の形式（系統別）〉

（表 6）〈出現率上位 3 位までのフィラー的用法の形式（系統別）〉

	フィラー的用法の形式の中で出現率が高いもののうち、上位3位（系統別）	合計
「接続詞系」	①「で」57.5%      ②「それから」8.8%      ③「だから」・「やはり」共に6.3%	78.90%
「指示詞系」	①「あの（－）」64.6%      ②「その（－）」28.9%      ③「この（－）」3.6%	97.10%
「感動詞系」	①「え（－）」32.4%      ②「あ（－）」28.2%      ③「お（－）」13.9%	74.50%
「副詞系」	①「ま（－）」87.5%      ②「も（－）」12.5%      ③ —	100.00%

（表 6）より分かったことをまとめる。フィラー的用法の形式の中で出現率が高いものを系統別に見た場合、まず、出現率の 1 位と 2 位の間、また 2 位と 3 位の間にはそれぞれ大差があることが分かる。1 位と 2 位の間について言えば、「接続詞系」で約 6.5 倍、「指示詞系」で約 2 倍、「感動詞系」で約 1.2 倍、「副詞系」で約 7 倍の差がある。また、2 位と 3 位の間について言えば、「接続詞系」で 1.4 倍、「指示詞系」で 8.0 倍、「感動詞系」で 2.0 倍の差がある。これは、それぞれの系統で頻出するフィラー的用法のことがかなり固定的であることを表している。

さらに、各系統の上位 3 位までのフィラー的用法の形式が全体に占める割合を見ると、「接続詞系」（「で」、「それから」、「だから」・「やはり」）で 78.9%、「指示詞系」（「あの（－）」、「その（－）」、「この（－）」）で 97.1%、「感動詞系」（「え（－）」、「あ（－）」、「お（－）」）で 74.5%、「副詞系」（「ま（－）」、「もう」）で 100.0%）であり、本論で扱った資料においては、各系統とも出現率が上位 3 位までの形式によって全体の 70%以上がカバーされていることが分かる。

これらより、フィラー的用法の形式はその出自の系統別に見ると、使用される形式がほぼ固定的であること、系統別に見た際の出現率が高い上位 3 位までの形式で、その系統のフィラー的用法の形式の 70%以上がカバーできるということが言える。

フィラー的用法の「で」、「あの（－）」、「え（－）」、「ま（－）」のインタビュー談話における出現率について

フィラー的用法のことばには個人の話し方の癖などが現れやすいと思われるが、実際の言語運用を考えた際には高い頻度で使用されるものはほぼ固定的であり、その中でも先述した（表 6）のとおり、接続詞系の「で」と副詞系の「ま（－）」は、フィラー的用法を持つ形式全体の中での出現率において卓出している。しかも（表 2）、（表 5）によれば、「で」と「ま（－）」の高い出現率は 1960 年代から 2010 年代までの戦後のインタビュー番組中の談話において安定的に観察できる。

以上を確認した上で、この調査結果を日本語教育の教授活動に還元することを試みる。具体的には会話指導のテキスト中で、上述したフィラー的用法の形式がどのように扱われているかを確認し、会話指導への提言を行いたい。

### 3.3. 現行日本語テキストで取り上げられたフィラー

以下に示したのは、現行日本語テキストの会話と問題部分で取り上げられているフィラーである。

（表 7）〈現行日本語テキストで取り上げられたフィラー〉

テキスト		フィラー	
		「あの（－）」	「えーと」
A. 『みんなの日本語』	初級Ⅰ（第2版）2014年 本冊	●	●
	初級Ⅱ（第2版）2014年 本冊	●	●
	中級Ⅰ（初版）2008年 本冊	●	
	中級Ⅱ（初版）2012年 本冊	●	
B. 『新日本語の基礎』 『新日本語の中級』	I・Ⅱ（初版）1993年 本冊	●	●
	（初版）2000年 本冊	●	●
C. 『初級日本語げんき』	I （第6版）2011年	●	
	Ⅱ （第2版）2011年		●
D. 『できる日本語』	初級 （初版）2011年版 本冊	●	●
	初中級 （初版）2012年版 本冊	●	●
E. 『まるごと初級』	初級1, A2, りかい 2014年版	●	●
	初級2, A2, りかい 2014年版	●	●
	初級2, A2, かつどう 2014年版	●	

※1 ●はそのフィラーが取り上げられていることを表す。

※2 フィラーの「あの（－）」には「あのう、」、「あのう」、「あの、」を、「えーと」には「えーと…」、「えーと、」、「ええと、」、「ええと…」、「ええっと」を含む。

※3 出現位置は全例文頭であった。

（表 7）に挙げた日本語テキスト中で採用されているフィラーは「あの（－）」（「あのう」、「あの」含む。）と、「ええと」（「ええっと」含む。）の二種であるが、（表 6）で示し

たようにインタビュー資料では、接続詞系フィラーの「で」、指示詞系フィラーの「その(一)」、感動詞系フィラーの「え(一)」、「あ(一)」、副詞系フィラーの「ま(一)」なども 20%以上見られる。そこでこれらのフィラーも含めた会話モデルを提案したい。

接続詞系フィラーの「で」については、

- ・「僕だって、で、それからいろいろあって、で、どうしようもなかったから。」(③・再掲)
- ・「我々は一、で一、筋肉というものがあるから、で一、立っていられますよね。」(⑱)

のように、文中に置かれて話をつなげる目的で使用される例がインタビュー資料では見られる。このようなフィラーは、話し手にターンを保持させて発話の続行を示す目的で使用されている。

指示詞系フィラーの「その(一)」については、

- ・「暢気すぎるって言って、みんなからその一、言われたとかですねえ、」(⑥・再掲)  
などの例が見られ、また、
  - ・「最近ではあの一その一、スタジアム、うー、ドームのスタジアムが、」(⑩・再掲)
- と、「あの一」に連続して「あの一その一」の形式で使用される例もある。

感動詞系フィラーについては、日本語テキストでは「えーと」を採用しているが、インタビュー資料では(表 4)のとおり、「えーと」よりも「え(一)」、また「あ(一)」の使用の方が見られる。

- ・「そこへ、え一、いわゆる心臓カテーテル、え一、いわゆる『心カテ』を」(⑫・再掲)
- ・「フカかサメか、あ一、はたまたトビウオかっていう…」(⑬)

これらは先述のフィラー「で」と同じく、話し手のターン保持と発話の続行の提示が目的での使用であり、特にビジネス会話でのスピーチ、プレゼンテーション等の場面での使用も想定できると考えられる。

副詞系フィラーの「ま(一)」は、

- ・「こういうところは、ま一、私の、ま一、性分、性分ですね。」(⑤・再掲)

等の使用が見られる。今回調査した日本語テキストでは「え(一)」、「あ(一)」、「ま(一)」などのフィラーは提出されていないが、これらのフィラーも含めた会話モデルをそのテキストの主旨(総合、会話、聴解等)に沿って採用することで、実際の日本語のやりとりにより一層近い会話練習が行えると考えられる。日本語テキスト執筆者の方々にはぜひご一考を願うものである。

#### 4. まとめ

以上、本論での主張をまとめる。本論では、まずインタビュー談話に出現するフィラー的用法をもつ形式を、接続詞系フィラー、指示詞系フィラー、感動詞系フィラー、副詞系フィラーと、その出自の系統別に統計的に考察し、1960～2010年代のテレビで放送されたインタビュー番組での全フィラー的用法におけるその出現率を示した。その結果、全フィラー的用法中に、接続詞系フィラーが5.2～12.1%、指示詞系フィラーが36.4～53.3%、感動詞系フィラーが15.2～29.6%、副詞系フィラーが10.5～39.0%と、全体を100と見ると、接続詞系7.3、指示詞系47.4、感動詞系22.1、副詞系23.0の割合で見られた。これは1960～2010年代の間大きく変化しておらず、即ち、戦後の日本語インタビュー番組で見られる談話のフィラー的用法の系統について普遍性があることを示した(3.1.)。

またそれを踏まえ、フィラー的用法の形式の出自の系統別に出現頻度が高い形式を示した。それらは、接続詞系フィラーが①「で」(57.5%)、②「それから」(8.8%)、③「だから」・「やはり」(共に6.3%)、指示詞系フィラーが「あの（－）」(64.6%)、②「その（－）」28.9%、③「この（－）」3.6%、感動詞系フィラーが①「え（－）」32.4%、②「あ（－）」28.2%、③「お（－）」13.9%、副詞系フィラーが①「ま（－）」87.5%、「も（－）」12.5%で、出現率が上位3位までの形式で、その系統のフィラー的用法の形式の出現頻度が高いものの70%以上をカバーすることが分かった(3.2.)。

その結果を元に既存の日本語テキストでのフィラー的用法として採用されている形式を確認したところ、「あの（－）」(「あのう」、「あの」含む。)と「ええと」(「ええっと」含む。)以外の形式については採用の実態が見られないことが分かった。そこで、インタビュー資料では頻出の形式であった接続詞系フィラーの「で」、指示詞系フィラーの「その（－）」、感動詞系フィラーの「え（－）」、「あ（－）」、副詞系フィラーの「ま（－）」なども含めた会話モデルをそのテキストの主旨(総合、会話、聴解等)に沿って採用すれば、実際の日本語のやりとりにより一層近い会話練習が行えると考えられるとし、日本語教育の会話指導に提言を行った(3.3.)。

#### 【参考文献】

- 伊佐早敦子(1953)「はなしことば序—不整表現を中心として—」『国語国文』第22巻第3号(通巻223号)、京都大学国文学会、pp. 183–201.
- 石黒圭(2010)「講義の談話の接続表現」佐久間まゆみ編『講義の談話の表現と理解』、くろしお出版、pp. 138–152.
- 遠藤嘉基(1953)「話し言葉と書き言葉」『言語生活』第21号、国立国語研究所内『言語生活』編集部、筑摩書房、pp. 22–29.

- 金水敏・田窪行則 (1992) 「談話管理理論から見た日本語の指示詞」, 金水敏・田窪行則編『指示詞』(日本語研究資料集第 1 期第 7 巻), ひつじ書房, pp. 123-149.
- 魏春娥「談話におけるフィラー「ま (一)」の待遇差に関する予備的考察」『東アジア研究』(13) 山口大学大学院東アジア研究科, pp. 75-93.
- 小出慶一 (1983) 「言いよどみ」水谷修編『講座日本語の表現[3] 話しことばの表現』, 筑摩書房, pp 81-88.
- 小出慶一 (2006) 「フィラー「このー」「そのー」「あのー」について: その由来、機能、相互関係」『埼玉大学 (教養学部) 紀要』第 42 巻第 2 号, 埼玉大学教養学部, p.15-27.
- 小出慶一 (2008) 「発話行動における「で」の役割—「で」のフィラー化をめぐる—」『埼玉大学 (教養学部) 紀要』第 44 巻第 2 号, 埼玉大学教養学部, pp. 27-40.
- 佐久間鼎 (1936) 『現代日本語の表現と語法』, 厚生閣.
- 佐久間まゆみ編 (2010) 『講義の談話の表現と理解』, くろしお出版.
- 定延利之・田窪行則 (1995) 「談話における心的操作モニター機構—心的操作標識「ええと」と「あの (一)」—」『言語研究』108, 日本言語学会, pp. 74-93.
- 塩沢孝子 (1979) 「日本語の Hesitation に関する一考察」, F・C・パン編『社会言語学シリーズNo. 2 ことばの諸相』文化評論出版, pp. 151-166.
- 田窪行則・金水敏 (1997) 「応答詞・感動詞の談話的機能」, 『文法と音声』, 音声文法研究会, くろしお出版, pp. 257-279.
- 大工原勇人 (2008) 「指示詞系フィラー「あの (一)」・「その (一)」の用法」, 『日本語教育』138 号, 日本語教育学会, pp. 53-62.
- 中島悦子 (2011) 『自然談話の文法—疑問表現・応答詞・あいづち・フィラー・無助詞—』, おうふう.
- 橋本進吉 (1948) 『国文法研究』, 岩波書店.
- 平川八尋 (1991) 「理工系講義に現れる接続表現の分析—教材作成のための基礎資料分析—」, 『長岡技術科学大学 言語・人文科学論集』5, 長岡技術科学大学, pp. 93-102.
- メイナード・K・泉子 (1992) 『柴谷方良・西光義弘・影山太郎編集日英語対照研究シリーズ (2) 会話分析』, くろしお出版.
- メイナード・K・泉子 (1997) 『談話分析の可能性—理論・方法・日本語の表現性—』くろしお出版.
- 森山卓郎 (2005) [項目: ■「アノ・エート・マア—フィラー」]、『新版日本語教育事典』, 日本語教育学会, pp. 188.
- 山田孝雄 (1908) 『日本文法論』宝文館出版.
- 山根智恵 (2002) 『日本語研究叢書 15 日本語の談話におけるフィラー』, くろしお出版.

『新版日本語教育事典』(2005) 日本語教育学会, 大修館書店.

#### [本論で使用したインタビュー資料]

- ①『時の表情 死の灰をかぶって 10 年 第 5 福竜丸』(1964 年 2 月 28 日・総合)
- ②『婦人の時間「この人この道」～鈴木大拙～』(1964 年 5 月 21 日・総合)

フィラー的用法の「で」、「あの(ー)」、「え(ー)」、「ま(ー)」のインタビュー談話における出現率について

- ③『人間国宝（ルポとインタビュー）（1966年11月3日・教育）
- ④『人間列島 18歳男子』（1971年6月10日・総合）
- ⑤『カメラリポート（L）「龍のふるさと」～千葉県北部～』（1976年1月6日・総合）
- ⑥『人 その世界第2回』（1979年12月30日・総合）
- ⑦『訪問インタビュー 80年代への対話（1）』（1980年1月1日・教育）
- ⑧『ビジネスウイークリー トップリポート 繊維カンバン方式をめざせサンデー・インタビュー 大隈武雄』（1986年9月28日・教育）
- ⑨『日曜インタビュー 作家 宮本輝』（1989年11月19日・総合）
- ⑩『産業インタビュー トップインタビュー』（1990年1月12日・教育）
- ⑪『ETV 特集 インタビュー ピカは人が落とさなきゃ落ちてこん』（1994年8月22日・教育）
- ⑫『ホリデーインタビュー 脳神経外科 若林利光』（1999年9月15日・総合）
- ⑬『BS フォーラム 新世代デザインが暮らしを変える』（2001年1月27日・BS）
- ⑭『食彩浪漫 祖母のうどんは僕の原点』（2006年10月8日・総合）
- ⑮『知る楽 仕事学のすすめ 勝間和代 働く女性 課題克服仕事論 第2回「チームと調和する」』（2009年8月13日・教育）
- ⑯『さわやか自然百景 新春スペシャル「森の国 日本」』（2012年1月2日・総合）
- ⑰『SWITCH インタビュー 達人達（たち）「夏木マリ×澤穂希～カッコいい女の条件～」』（2014年5月10日・教育）
- ⑱『ハートネット TV 山田賢治のメンタルヘルス入門#1「ナルコレプシー」』（2016年2月2日・教育）